



PLAY 2 PLAY

—干渉する次元(改訂版再演)

演出振付：金森穰
空間：田根剛 (DORELL, GHOTMEH, TANE / ARCHITECTS)
音楽：トン・タツ・アン
衣裳：三原康裕 / 堂本教子
出演：Noism1

井関佐和子
中川 賢
真下 恵
青木枝美
宮原由紀夫
亀井彩加
角田レオナルド仁
簡 麟懿
石原悠子
池ヶ谷奏
吉崎裕哉

金森 穰

【新潟公演】
2013年12月20日、21日、22日
りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館〈劇場〉

【神奈川公演】
2014年1月24日、25日
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉



自分だけの情景

「PLAY 2 PLAY」は特に心に残る作品のひとつである。と同時に、特に悔いが残った作品でもある。初演は東京で正面席から1回見ただけだったので、「舞台上席からも見るべきだった」と激しく後悔したのである。再演はリベンジのチャンス、しかも金森さんが踊る。後悔する余地がないよう、新潟・神奈川の正面席と舞台上席を1回ずつ、合計4回のチケットを取った。

最初は正面席から。「好きな作品」と言いつつ、実はDVD也未開封だったので、詳細はよく覚えていない。比較してどうこう考える以前に、幕開き直後の金森さんと井関さんのダンスにのめりこんでしまった。Noismの本公演で2人がガッツリ組むのは久しぶりで、次がいつになるかも不明だ。一瞬たりとも見逃すまいと気合いを入れた。

正面席からは、裏で何が起きているのかほとんどわからない。逆もそうなら、舞台上席から2人のダンスは良く見えないはず。では何が?という期待と不安がよぎる。

三角柱の中にダンサーが入るシーンは、自分の記憶よりも美しく、かつ、禍々しかった。冷たい光の中に、浮かんでは消えるダンサーの蠢き。上へ、横へ。膨張と伸縮。繋がることへの希求と、繋がることへの畏れ。外側に立ちつくす金森さんは何を象徴するのか。

柱が取り払われると、ふたつの客席が向きあう。舞台上席は意外と遠くに思えた。

ラストのパートは広く、明るく、暖かい。井関さんがのびやかに舞い、その周囲にダンサー達が現れ、去ってゆく。設立3年後の初演ではメンバーの半分が入り替わっていて、彼ら・彼女らへの、仲間としての惜別が込められていたという。今、残っているのは井関さんのみ。現メンバーも仲間には違いないだろうけれど、指導すべきダンサーも多い。惜別を越え、孤独を受け入れて進むしなやかな強さを感じさせた。

カーテンコールでは、ダンサーとして列に並ぶ金森さんの姿を見るのが嬉しかった。

翌日は舞台上席。まず、ダンサーが踊るスペースの狭さと近さに驚いた。予想通り、柱の向こうは断片的にしか見えない。金森さんと井関さんが踊っているな…と前日の記憶を反芻していたが、すぐにそんな余裕はなくなった。前後左右から代わる代わるダンサーたちが駆け込み、手が届きそうな、息遣いまで聞こえそうな距離で、濃密に踊り続けるのだ。その近さは尋常ではなく、軽い恐怖感を感じるほど。

金森さんのソロもある。2種類のため息が出る。やっぱり凄い、という感嘆のため息と、なぜもっと度々観客の前で踊ってくれないのか、という愁嘆のため息だ。特にインパクトが強かったのが、

金森さんと中川さんの絡み。男女より、男性同士の組合せの方が、時に妖しい色香を放つ。見てはいけないうものを覗いたような……。最も心拍数が上がった瞬間だった。

この「裏側」は、限られた人たちしか目撃できない。少しは見えたとしても体感できない。映像も公開されないだろう。贅沢というか、もったいないというか、ズルいというか……。

作品としては正面から見るときのものだと思う。新聞や雑誌に載る批評も、おそらく正面席から見たも

ので、それが一種の正式な記録として残り、後世の人が過去の作品を考えたときの切り口となる。しかし、「裏側」は確実に存在する。舞台の記録は一面でしかない。その場にいることだけが全てなのだと改めて痛感した。

新潟公演の後、ようやくDVDを開封。映像に残った初演が、自分の記憶よりずっと攻撃的だったことに少し驚いた。ダンサー達が生々しくぶつかり合い、ヒリヒリとした緊張が絶えず流れる。その分、ラストがより明るく、救われたという感覚が強く残ったのかもしれない。その場にいたときの記憶もまた、うつろで不確かだ。再演では、金森さんの存在がワンクッションとなり、ダンサー同士のぶつかり合いのトーンは低くなった印象だ。Noismにもそんな変化があったのかもしれない。

年が明けて1月、神奈川の初日は正面、2日目は舞台上。見えるものを感じることを、取りこぼすことなく自分の中に吸収し蓄積したいという願いを抱いて、それぞれの席に座った。記録に残せない、記憶にも残らないかもしれない自分だけの情景を。

舞台から見上げる客席は意外と近くに思えた。満席となった2日目、大きな拍手を体全体で受け取るように感じられたことが嬉しかった。

次回公演が終わると、また複数のメンバーが入れ替わる。新鮮な才能との出会いも楽しみだが、井関さんや中川さんと拮抗するようなダンサーの加入にも期待していた。そしていつか、何らかの形で、元メンバーと現メンバーが共演する舞台が見られないものだろうか…と勝手な妄想を膨らませている。

安藤貴映子 (会員番号 No.73)



「想念の他者」としてのNoism

～Noism1『PLAY 2 PLAY —干渉する次元』(改訂版再演)～

今回、6年振りに『PLAY 2 PLAY —干渉する次元』の改訂版を再演するにあたり、金森穰は公演の遙か前から、テーマのひとつとして、「想念の他者」という表現を繰り返し口にしていた。曰く、「『3.11』を経験して、日本人は多くの人を失ったが、例え現実には存在しなくなったにせよ、『その人』から影響を受けているということは否定できない、そういう存在がある」と。それを耳にする度、「他者」であり、「想念」であるという「二重に」思弁的な観念を、思弁とは対極に位置する身体でどう可視化してみせるのか、興味を掻き立てられ、大きな期待を抱えて公演を待った。

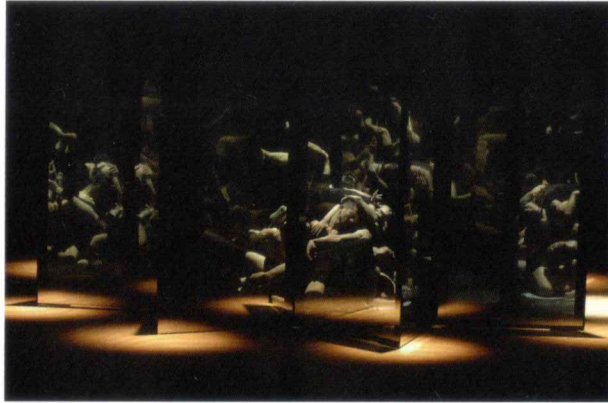
この作品は、「Noism07」としての初演時、「本気で、真剣に遊んで(PLAY) みようよ」と、最初に「全体像」を描くことをせず、逆に、美術の

田根剛、音楽のトン・タツ・アン、衣裳の三原康裕にテーマ「PLAY」のみを伝え、それぞれ自由に製作を依頼し、それを受けて、金森穰が演出振付する形で創作されたものであるらしい。その際、カンパニーを離れるメンバーたちへの惜別の思いも強かったというが、6年を隔てた今回、再び踊るのは井関佐和子ひとりとなり、他のメンバーにとっては「再演」というより「新作」に近いものであることから、金森穰は、彼ら一人ひとりが過度に初演時を意識するのではなく、舞踊家としての現在の「生き様」を示してくれることを願って、かなり大がかりな振付の変更を行ったということでもある。(なお、今回、衣裳に新たに堂本教子も名を連ねている他、音楽にも改訂が施されている。)

さて、この『PLAY 2 PLAY』という作品、その最大の特徴は何と言っても、舞台パフォーマンスにおける「正面性」を審理に付す意図の許、表側と裏側の「ふたつのPLAY」が、干渉し合いながら展開していく点であろう。その二界を分かつのは9本の屹立するアクリル板で造形された三角柱。それらが、あたかも衝立でもあるかのように、舞台を表側と裏側に分割する装置として並べられ、更に裏側の空間のその奥に72席(KAATは80席)の舞台上席を有するのである。故に、チケット購入の段階から、観客は表側を観るのか、裏側を観るのかの選択を迫られることになり、どんなに卓越した眼力の持ち主であったとしても、この作品の「全体」を観ることは叶わないばかりか、はなから見えるものが異なっているのである。しかし、考えてみれば、人はすべからず、場所的有限性に縛られながら人生に関与している訳で、自らの「立ち位置」からしか物を眺めることは出来ない。それはまさにインドの寓話「群盲象を評す」が象徴的に示すように、足、尾、鼻、耳、腹、あるいは牙といった部分に過ぎないそれぞれで、象の全体を表象させて語ってしまうとしても、それはある程度まで不可避的なことでしかないと考えよう。だとすると、「全体」などという観念的な仮構物は一旦棚上げしてしまった方がよからうかと思われる。加えて、眼差しの欲望を剥き出しにして舞踊に視線を注ぐ私たちが「群盲」と併置されてしまうことの、何たる皮肉。しかし、金森穰とNoismすらの転を免れることは出来ないといえるまいか。彼らにしたところで、「新潟」という場所的有限性の裡で創作をする身に過ぎないからだ。剔抉することもままならぬほど、「新潟」が作品にその影を落としているに違いないと考えてみることは、新潟市民にとって、何と愉快で誇らしいことではないか。作品に話を戻そう。この『PLAY 2 PLAY』では、表側と裏側の二界それぞれに「見えるもの」もあり、「見えないもの」もある。更に、鏡面の効果から、ひとつ隣の席とも見えるものすら異なってくるだろう。しかし、そんなこと自体、人生に付きものでしかないのだし、ここでもそのまま受け入れる他あるまいと覚悟を決めて、自らの席で刮目する他にないのだ。

開演。冒頭、まずは舞台を前後に分かつ衝立のように、9本の三角柱は全て凸面を表側に向けて並べられ、その「屏風」風の表側と、平滑な面が揃い「壁面」然とした裏側とで同時に舞踊家が踊り始める。「ふたつのPLAY」が同時進行していく舞台として始まる。舞台上の三角柱群は、やがて、部分的にこじ開けられて以降、凸面と平滑な面を組み合わせられたかと思えば、最初とは逆に表側に平滑な面を揃えたり、はたまた、舞踊家を

内側に取り込む形で円形に閉ざされたりとその様相を次々に変えていく。そして遂に舞台のあちらこちらに別々に立つ9本にばらけてしまうまで、舞踊家はその時々、表側と裏側とを駆け抜け、内側と外側を行き来しながら、様々な場所で踊り続ける。その後、金森穰に導かれるように、舞踊家たちがその9本を両手で押して舞台そでに移動させてしまい、舞台を挟んで、通常の客席と舞台上



席とが向かい合うに至るまで、あくまで見えないものは見えない、そういう作品。また、照明の当て方によって、アクリル板の三角柱は鏡面反射をしたり、または向こう側を素通しで見せたり、更には、まったくの壁面と化して視線を遮って立ちただかることになったりとヴァリエーションゆたかにその様相や効果を異にする。そのため、見えることもあるし、見えないこともある。また、部分的に見えない箇所があるかと思えば、通常なら見えない角度から舞踊家に視線を注ぐことが可能だったりもする。そのどの瞬間も、私たちが目にするのは金森穰によって緻密に計算され尽くされた美しさであり、それを何かに例えるなら、刻々模様を変えていくまさに「万華鏡」。その都度、息を飲んで見詰めるしかない、「幻視」の体験、あるいは「夢幻」のとき。

また、衣裳に目を転ずるなら、この作品からは、「黒」と「青」の、そして唯一の「特別な黒」を巡るストーリーを紡ぎ出すことが出来るだろう。ほぼ全編を通して「黒」の衣裳の井関佐和子が、「黒」と「青」を様々に着替える他の者たちと絡みながら、「想念の他者」にして「特別な黒」をまとう金森穰を追い求めるストーリーである。「青」が「黒」を追ったり、「黒」が「青」を駆逐したり、様々に関係が入り乱れるなか、「黒」を通していたはずの井関佐和子も途中ただ一度自ら「青」をまとうものの、やはりそこに安住することは出来ず、「特別な黒」金森穰に導かれるように「青」の集団から出ることを選ぶ。閉じた三角柱のなか、「青」の舞踊家たちが絡み合い、重なり合い、繋がってうめく様子など、「あの津波」を連想させながらも、ひたすら「美しい苦悶」に昇華されていて、ひとの尊厳すら見事に可視化されていたと言えよう。

9本の三角柱の衝立、その表側から裏側へ、あるいはその逆に越境が始まり、「黒」と「青」も互いに干渉し合う。シンプルな美術装置と衣裳が可能にする多義的で、象徴的な舞台。そして「神話的」な響きの、硬質で深みのある音楽。そこにこれまで幾度も目にしてきたNoism作品に共通する舞踊のポキャブラリーを金森穰による刻印として目視しながら、私たちはりゅーとびあ・劇場という空間に立ち現れる格別な美しさに固唾をのみ、瞬

きもできない。この75分間に限るなら、恐らく、地上の他のどんな場所にもこれに比肩し得る美しさなど存在していなかったと断言できるだろう。「夢幻」のとき。ただただ瞠目せよ。そして酔いしれよ。

私は家族とともに、新潟公演の2日目に、まずは舞台上席というまさに「プレミア・シート」の最前列から舞踊家の身体に視線を注ぎ、翌日、新潟の楽日には表側の最前列からこの作品の美しさを楽しんだ。舞台を挟む両側から、それも至近距離から観ることで、この作品を心ゆくまで堪能したと言える。表側は広い空間があるものの、同時に踊る舞踊家の数は概して少なく、大きく移動しながら優雅に踊り、裏側は「(最前列のお客さんに)ぶつからないように注意しなければならない」(金森穰)ほどの極端に狭い空間を、多人数が密集して細かく、運動量も豊富に踊っている。開けた空間の中に舞踊家を位置づけて眺めることになる表側と、人の視野限界という条件に加えて、眼前で展開される舞踊の「事件性」に視線を釘付けにされ、ここでも「全体」を放棄し、局所を凝視することにならざるを得ない裏側。表側を優雅とするなら、裏側は雑多にしてスポーティ。「屏風」を背景に始まり、祝祭的な雰囲気の中、ある意味、ストーリーが楽しめる表側と、「壁」に奥行きを奪われながらも舞踊家個々の身体性の突出を目撃し、度肝を抜かれる裏側、等々、まさに好対照。まったくその趣きを異にする表側と裏側の二界で、同時進行する「ふたつのPLAY」がやがて互いに干渉し合い、止揚され、ひとつに統合されていく。この世のものならぬ美しい多様性に魅了され通しの75分からこちら、陶酔の余韻を引き摺りながらも、それが徐々に虚脱感に姿を変えて身中深く巣くいついていくことも否めない。年に2回の公演時期にしかあひまみえることが出来ず、その折にはいつも虚構に過ぎない「もしも」をいっとき舞台上で「リアル」に変えてくれるNoismは「まれびと」のようでもあり、また、私の存在の奥深いところで息づき、それを意識せずには片時も過ごすことが出来ないという意味では、まさに「想念の他者」そのもの。磨き抜かれた身体が放つ刹那の煌めきで日常という次元に干渉を始めてくる圧倒的な存在。そして瞳を預けきって翻弄される快感。今回、KAATでの公演は見送ってしまったため、次はほぼ半年後、6月と告知された新作『カルメン』を観る日まで、「想念の他者」としてのNoismは不在のうちに私の心を騒がせ続けることだろう。これほど確かなこともまたとはあるまい。

下村 伸(会員番号 No.373)

